第9章　「戦後日本史」の叙述をめぐって（講演録）

成田　龍一

1　あらためて「戦後日本史」を考える

「同時代史」とは

「戦後」という時代が、いろいろと議論されています。いったい「戦後」というのは何なのか。また「戦後」とは、どのように考えたらいいのだろうか。そのことの入口を、今日は作ってみることができればと思っています。「戦後日本史」の叙述をめぐってということで、お話をさせていただきたい、と思います。

「戦後」を考える上で出発点になることは、「同時代史」である、ということです。「同時

代史」という言葉は、ご承知かと思いますが、「みなが経験している」「みなが一緒になって歩んできている」という歴史のことです。現在進行形で経験している歴史、と言ってもよいでしょう。このとき、同時代ではなく、歴史の「史」がついていますが、これが実は、なかなか厄介なんですね。

みんなが経験していることだから、みんなが知っていること。でも、みんなが知っていることだけれども、あえて歴史として語ろうというのが「同時代史」ということにほかなりません。

ですから「同時代史」ということを言った瞬間に、「いやいや、あなたが語っている「同時代史」はおかしい。私はこういうふうに考えている」「いやいや、それだっておかしい。私はこういうふうに考えている」となります。みんながそれぞれ経験を持っていますから、なかなか「同時代史」は一致、すなわち統一された歴史像となりにくい。そういう厄介な、したがって面白い歴史です。

しかもですね、「戦後の歴史」、「同時代史」として語るときに、「いやいやいや、私の実感としては、そんなことはなかったぞ」というふうに言われると、歴史家としてはつらいですね。実際に、体験をした方が持っている感覚は、歴史を考えるうえで一番大切。歴史

というものは、生きてきた方たちの経験と思いが軸になっていますから、そのことを歴史として語るには、とてもたくさんの困難があります。一つの例を見てみましょう。

昭和史論争

お手元のレジメの中で書いておきましたが、一九五五年、今から六〇年前に、『昭和史』という本が出ました。「昭和」でいうと、昭和三〇年ですね。昭和三〇年の時点で、歴史家たちが、『昭和史』という本を書きました。文字通り、「同時代史」として提供されたわけですね。「さあ、みんなが経験してきたことを歴史として語ってみよう」ということをおこなったもんですから、この本は一方でベストセラーになった。ベストセラーになるとともに、すったもんだの大激論となりました。

先ほども申し上げたような議論が、公然とおこりました。「私たちが体験してきた昭和の歴史は、こんな形で書かれては困る」「いやいや、そうじゃないだろう。やはりこういうふうに書いたらいいだろう」というような議論がありました。「昭和史論争」という、歴史学の中における重要な論争になっていますが、「戦後史」を語るというときには、絶えず、こういう「同時代史」として論争を伴っている、ということになります。

歴史観の相克

今日は、戦後の歴史が、同時代の歴史がどのように描かれてきたか。さまざまな戦後史の描き方があることを示し、その入口を作っていくと申しました。しかし、このことも、歴史学にとっては、とても重要な問題をはらんでいます。

すなわち、歴史―戦後史ということを考えた場合に、ここにいらっしゃる皆さんは、まず「事実」が先にあるというふうに考えているだろうと思います。たしかに、そうした「事実」を明らかにするのが歴史ということになります。

しかし、「同時代史」としてさまざまな「戦後史」があるということを今日、お話しするのですが、そうすると歴史というものは、「事実」に基づくというよりも、「事実」をどのように考えるのかということになるでしょう。「事実」があるはずなのに、なぜ「さまざまな」歴史―戦後史があるのか。

これは、「歴史とは何か」ということにかかわってくることです。同時代史には、こうした原理的な問題も入り込んできます。とても難しいことに関わらざるをえません。そのゆえに、といってよいと思いますが、先ほどから申しておりますように、論争を伴うような事態も引き起こすのです。

冒頭から、ややこしいことを申しました。こうしたことを踏まえた上で、どのような形で「戦後」というものが考えられてきているのかということについて、お話ができればと思っています。

2　「戦後日本史」の〈いま〉

中村政則による時期区分

「戦後」ということを考えるときに、まず、一人の歴史家に登場をしてもらおうと思います。中村政則という方です。長い間、ずっと一橋大学の先生をしており、一昨年、亡くなられました。この中村政則さんが『戦後史』（岩波新書）という書物を書かれました。二〇〇五年、つまり、敗戦からちょうど六〇年の年を意識して書かれました。「戦後史」のレールを引こうという試みの本です。「戦後」を「同時代史」として語るときに、私は歴史家だから、こういう形でみなさんの「戦後史」に対する考え方を提供する、という形で書かれています。

中村政則さんの考えでは、「戦後」というのは、一九四五年八月一五日にスタートします。今までの戦争（アジア・太平洋戦争）は終わった、負けて終わったわけですが、そこから

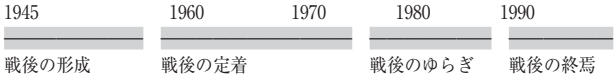
「戦後」がスタートするという考え方です。

そして一九四五年、戦争に負けた後、「占領」という事態が続きます。その占領の下で、今までの戦争を反省して、民主主義の時代というものが始まった。これは「戦後」の形成です。

形成された「戦後」は、一九五五年から一九六〇年ぐらいの間に一回り廻り終わって、そして一九五五年、ないし一九六〇年ごろから「戦後」が定着するという認識です。具体的に申しますと政治の面で、一九五五年に「五五年体制」というものが出来上がる——占領の時期が終わって、そして日本が独立を回復した後、新たな日本の政治の体制「五五年体制」と呼ばれる体制が出来上がった。自民党・保守党とそれから社会党・革新の政党がだいたい二対一の割合で議席を獲得し、政治の構造を作るのです。

他方、経済の面では、「高度経済成長」の政策—所得倍増政策が採られていく。そうした政治・経済の面で「戦後」の政策がなされ、「定着」していくと、説明をします。

しかしそのような「戦後」は、まず経済の面で躓きます。一九七三年、第



中村政則『戦後史』（2005年）。中村は1935年生まれ。

一次オイルショックで、高度経済成長が終わる。そして、「戦後」が揺らぎ始める。一九七三年から「戦後」が揺らぎ始めるという認識です。その後、第二次オイルショックがあるものの、日本はいち早く石油危機を脱却して、体制を立て直します。しかし、資本主義は変質してしまい、日本は、もはやかつてのような高度経済成長は行うことができなくなる。現在からみると、それでも四％～五％くらいの経済成長はあるのですが、高度経済成長は、年一〇％くらいの成長があるという驚異的な時代でした。しかし、それを生み出した「戦後」は揺らいでいくのです。

この後、バブルという現象はありながら、しかし一九八九年に冷戦体制が崩壊する。偶然ですけれども、ちょうどそれと期を同じくするように、昭和天皇が死去し、「昭和」の時代も終わりました。

一九八九年を切っ掛けにして、「戦後」の揺らぎが、「戦後」の「終焉」に向かっていきます。そして、二〇〇一年には「戦後」が終った――これが中村政則さんの「戦後史」の認識です。「戦後」が形成されて、定着するけれども、それが揺らいで、そして、今や終わったという流れですね。

これは、同時代を経験してきた者にとって、分かりやすい戦後史の認識です。みなさん

が戦後史を勉強するときに、中村政則さんの『戦後史』は、最初の手掛かりとして最適でしょう。分かりがいいということを、中村政則さんも自覚をしていて、こう言っています。

年齢的にいって、私は戦後史執筆にとって有利な立場にあった。敗戦の年、私は一〇歳（小学校五年）であるから、当時のことは鮮明に記憶しており、それ以後の歴史についても、あるときは国の外から、日本の政治・経済・外交の動きを観察する機会にめぐまれた。こうして自分の体験を、歴史叙述に盛り込むという叙述の方針が決まったのである。

つまり自分の生きてきた過程が「戦後史」そのものである。文字通りの「同時代史」として、この書物を描いている。「私、優位な立場にいたからね」と、まあこういう話ですね。ここにいらっしゃる多くの方は、「そうだ、そうだ」と思われると思います。

でもよく考えてみますと、例えば、私などが目の前にしております学生たちは、この「戦後」の終焉の後に生まれています。「私たち、じゃあいったい何者」、学生たちにとってみれば、そういう形になるわけですね。

中村政則さんのような経験に基づく「同時代史」は、多くの方が共感を持つとともに、そこから疎外されて、「私たちは、いったいどういうふうに考えたらいいのだろう」という人も生み出している。このあたりが「同時代史」の難しさです。

中村政則さんは歴史家ですから、たくさんの資料を見て、出来事を明らかにします。同時に、中村さん自ら語っていますように、自分の生活の実体験がありますから、それを織り込みながら同時代史としての『戦後史』を描いていく。

ですから『戦後史』はとても説得力があります。だけれども、説得力があればあるほど、そこから疎外をされてしまう若い世代もいる。これが「戦後史」の面白さと厄介なところです。

中村さんの「戦後史」は、出発点を一九四五年八月一五日においていることが一つの大きな特徴になります。つまり、日本は、今まで明治維新から近代の歴史というものを歩んできたはずなんだけれども、どうもボタンが掛け違った。そして、アジア・太平洋戦争という戦争に突入してしまった。それで八月一五日の敗戦を迎えたから、もう一度、近代をやり直そう。その認識で戦後を理解し、「戦後史」を考えていることが伺えます。「近代社会」として「戦後史」を考えた、とレジュメにも書きましたが、近代というものの価値を

再学習していく過程が「戦後史」であったというのが、中村さんの姿勢になっていると思います。

社会学者による戦後日本史像——専門による差異

中村政則さんとほぼ同じ時に生まれながら、異なった「戦後史」のイメージを作り出した人に、見田宗介という人がいます。社会学の先生です。一九三七年生まれですから、中村政則さんとは二歳違い。ほぼ同じ経験をしているはずですけれども、見田さんの認識は異なります。

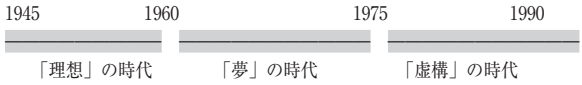
見田さんは「戦後」を考えるときに、一九四五年から六〇年ごろまでを「理想の時代」といいます。「現実」の対語として「理想」を抽出し、「みなが理想を求めている時代」と説明します。そして一九六〇年から八〇年ごろまでを「夢の時代」、みなが「現実」に対し「夢」を見て、「夢」を追いかけていた時代として考える。その後、一九八〇年以降を「虚構の時代」と考えます。「虚構化する力」をいうのです。

中村政則さんの「戦後史」に比べると、いくぶん分かりにくいか、と思います。中村さんの「戦後史」は、「形成」「定着」「ゆらぎ」「終わり」という形ですから、とても歴史と

して分かりやすい。それに対して、見田さんの場合には、ちょっと分かりにくいかもしれません。しかし、あらためて見てみると、「同時代」を生きた人々が何を考えていたのか、何を追いかけていたのか、何を求めていたのか、ということを軸に「戦後史」を考えてみようという議論です。

見田さんによれば、戦争が終わった後、人々は「理想」を追い求めている。そして高度経済成長に直面することによって、その理想が「夢」、つまり実現するだろう、と「社会」を考えていると把握されます。ところが、いったん高度経済成長が実現してみると、「現実」がもたらすものは「虚構」であり、虚構によって現実が構成される時代に入るとされるのです。「虚構」の時代というのは、自分たちが獲得したと思ったリアリティが実は「虚構」であったと、虚構化する力を再評価する時代ということです。

つまり、高度経済成長を軸に「戦後史」を考えてみると、より人びとが考えていたリアリティに近づくことができるのではないだろうか、というのが見田さんの時期区分です。人々の「欲望」が（「現実」の対として）「理想」として語られ、そして手の届く「夢」のような形になり、実現した瞬間に「虚構」



見田宗介『現代日本の感覚と感情』（1995年）。見田は1937年生まれ。

になっていった、と考えていく。

中村さんの場合には、そういう意味でいうと、ちょっと神様の目のように、「戦後があったよね。こう戦後は変わっていったよね」という認識です。見田さんの場合には、より人びとの実感に近いところに入り込んでいこうとし、高度経済成長によって、日本の社会が大きく変わってきたということを強調するような「同時代史」の捉え方になっています。

この見田宗介さんの考え方を、もう少し歴史的な形で整理すると、吉見俊哉さんの考え方になります。一九五六年生まれの社会学者です。吉見さんの考え方は、見田さんの考え方を引き継ぎながら、高度経済成長が、日本の「戦後」にとって重要な出来事であったということをあらためて強調します。

高度経済成長という人々の経験を軸に「戦後」の流れを考えてみると、一九四五年から狭義の「戦後」が始まった。そしてこの時期に、高度経済成長という変化を人々が実現し、経験していくとし、ここを「戦後」の内実とします。吉見さんの戦後史の特徴は、高度経済成長が終わった瞬間に「ポスト戦後」の時代に入ったといい、「戦後」と「ポスト戦後」を合わせ鏡のように把握することです。

「ポスト戦後」の時代は、見田宗介さんのいう「虚構」の時代と重なります。今まで自分

たちが追い求めてきたものは、いったい何だったのだろうか、自分たちが実現しようとしたものは、何だったのだろうか、そういうことに対する深い反省の時期が、「ポスト戦後」の時期です。別言すれば、高度経済成長によっておおきな変化を経験した人々が、さらなる変化を経験するのが「ポスト戦後」という認識です。さらに現在ではあらたな変化が進行しており、「ポスト・ポスト戦後」になっているという考え方です。

「高度経済成長」という形で人びとが自らの社会の充実や、自己の実現をはかろうとした、これが「戦後」のあり方だったでしょう。しかし、それが実現した瞬間に「ポスト戦後」の時代に入った、というのが吉見さんの認識です。高度経済成長は実現した瞬間に、また変化をはじめ、実現した成果を壊していく……。となれば、そういう私たちの今まで（＝歴史）とは、いったい何だったのかという、問いかけの時代でもあるはずです。しかし、その問いを先送りするように、「ポスト戦後」から、さらに「ポスト・ポスト戦後」という、もう一つ、二つ先の時期にいってしまっている、ということになるでしょう。

吉見俊哉『ポスト戦後社会』（2009年）。吉見は1956年生まれ。

中村政則さんが「近代」を大切にしながら「戦後」を考えてきたのに対し、この見田さん、吉見さんたちは「現代社会とは何か」という問いの下に戦後社会を考えていっているということでもあります。そして、同じ「同時代史」であっても、まったく違った歴史像を出してきているということも、ここに起因しているでしょう。同じ歴史の過程をみていても、何を軸に「戦後」を考えるかということによって、その歴史像はずいぶん違ってくることになります。

アメリカにおける戦後日本史像——文化的背景による差異

アメリカの人たちの考え方をみてくると、さらに様子が変わってきます。アメリカにおいても日本の研究、日本の「戦後」を考えようという動きはずいぶん盛んです。一九九三年の段階で、早くもアメリカでは『歴史としての戦後日本』という共同研究が行われています。アメリカというのは、問題をかなり早く考えてみようというところがある、というふうに思います。

アメリカでも、たくさんの人たちが戦後日本を考察しています。代表的な論者として、ヴィクター・コシュマンさんの「知識人と政治」という議論を紹介してみましょう。コシュ

マンさんは、一九四五年から五五年までを「知識人と民主革命」として戦後日本を捉え、一九五五年から六五年を「安保危機の時代の知識人」、一九六五年から七五年を「管理社会における抵抗と理論」、そして一九七五年から八八年を「ポスト・モダンの両義性とニューアカデミズム」と把握します。これまで見てきた「戦後」の描き方とはずいぶん違った「戦後史」が、ここで登場してきています。

見田さん、吉見さんが強調していた「高度経済成長」は、コシュマンさんにおいては、「管理社会」とそのもとでの「抵抗」と把握されています。高度経済成長の時代は、むしろ管理社会を生み出したのではないか、という認識が示されています。高度経済成長にのめり込む戦後史像ではありません。中村政則さんが強調していた「戦後」の民主主義や安保を、コシュマンさんもまた捉えますが、知識人論としての展開です。

ずいぶん違うんですね。付け加えれば、コシュマンさんもやはり「ポスト・モダン」を重視するのですね。ですから「戦後」は、近代社会であるけれども、同時に、「ポスト・モダン」をもたらしたのだとされています。捉え方によって、戦後史もずいぶん様相が違ってきていることになります。

戦後における二つの世代——世代による差異

新しい世代を入れると、さらに様相が違ってきます。今まで、中村政則さんも、見田宗介さんも「戦後を自覚的に生きてきた」と言っています。これは吉見俊哉さんまで続いているんですね。中村・見田さんは戦争経験世代ですが、吉見さんも実は、中村さんや見田さんから学んでいますから、戦争に関しては同じような考え方を持っている。

吉見さんを（評論家の斎藤美奈子さんに倣って）「戦後第一世代」と仮に名づけますと、あらたに「戦後第二世代」という世代が登場してきていることに気づきます。つまり一九七〇年以降に生まれた世代が登場してきている。

「戦後第一世代」、つまり中村政則、見田宗介といった戦争経験世代と地続きの戦後生まれ——四〇年代後半から、五〇年代、六〇年代生まれぐらいまでは、「戦後」を、それなりに見てきていますから、同じような感覚を持っています。

ところが、一九七〇年代に生まれた人たちは、高度経済成長で変化した日本の後に生まれているわけですね。そうすると（「戦争経験世代」を含めた）「戦後第一世代」が見た光景と、あらたに登場した「戦後第二世代」が見た光景とは違うことになります。

別の言い方をすると「戦後」は、中村政則さんの議論に従うと、「戦争に対する反省」で

す。中村さんの場合、戦争体験をしたのは当人で、八月一五日を一〇歳で迎える。見田宗介さんも同様です。見田さんに習った吉見俊哉さんにとり、戦争体験者は父母の世代になります。父親や母親から、戦争がどういうものであったかを知り、その知見をもとにしながら「戦後」を考えています。これが「戦後第一世代」です。

それに対して、「戦後第二世代」は、高度経済成長によって変化した後の日本に生まれますが、戦争体験者は誰かというと、祖父母の世代になります。祖父母の戦争体験というものは、父母の戦争体験に比し、ずいぶん距離があるんですね。父親、母親から戦争体験を伝えられるということは、一緒に暮らしながら、父親、母親の表も裏も知りながら、「戦争体験は、こういうようなものなんだ」と学んでいく。ところが祖父母になりますと距離があり、戦争体験は、生々しい形ではなかなか伝わってこない。戦争体験の学習の仕方が違うんですね。

つまり、「戦後」の核になる戦争の捉え方が違うこととともに、先ほどから強調しておりますように、高度経済成長に対する向き合い方も違ってくる。こうして、「戦後第二世代」が登場してくると、さらに「戦後」のイメージが変わってくることになります。

「戦後第二世代」の論者の一人として、白井聡という政治学者を紹介しておきましょう。

白井さんは、一九七七年生まれです。白井さんの議論は、「戦後」は、「永続敗戦の体制」であったというものです。白井さんは、「戦後第二世代」として、祖父母が戦争経験者であり、文化的に戦争経験を学ぶ世代ですが、その彼にとってみると、「戦後」の過程は、「日本が戦争に負けたということを、ずっと認めないできている過程のように見える」ということとなります。

中村政則さんは、一九四五年八月一五日を「戦後」のスタートにしていました。ということは、日本が戦争に負けたことを契機に、日本が再び戦争を繰り返さないようにしようとした過程として「戦後史」のレールを引いたということになります。

ところが白井さんの世代になってみると、その目に映るのは、「いやいや、そうではなくて、日本は戦争に負けたということをずっと認めていない体制のように見える」ということなのです。

つまり、別の言い方をすると、日本は、アメリカの言いなりになっている。それがずっと続いてきた過程が戦後であるように、白井さんの世代には見えるわけです。このことは、日本は、戦争に負けたということをずっと否認しつづけているという認識とセットになっています。「永続敗戦の体制」というのはそうした意味です。敗戦を否認しつづけるという

ことが、「戦後」の過程であり、そのことと引き換えに（背中あわせに）、アメリカの傘の下に、ずっと言いなりになってきた。その体制として「戦後」があるのだという考え方です。

そもそも、白井さんの考え方によれば、日本が戦争に負けて反省したならば、天皇制が「戦後」には残らないだろうということになります。「象徴天皇制」という形であれ、天皇制が残っていることは、日本が戦争に負けたことを本当に反省していないということではないだろうか。同時に、その天皇制をアメリカが利用している。アメリカと日本の体制が、実は互いに協力しあって「戦後」の体制をつくってきた、というのが白井さんの認識です。

ことばを換えれば、アメリカの言いなりになっている限り、ずっと「戦後」は続いているのだという認識です。こうした認識を、新しい世代は、持ち出している。

（「戦争経験世代」+「戦後第一世代」という）上の世代にとってみると、「同時代」として「戦後」を生きてきたわけですから、いろいろと思うところはあっても、「こういう形で動いてきてしまったよね」と、戦後の動きにそれなりの理解を示す。しかし後の世代からすると、「いやいや、おかしいでしょう。どこか誤魔化しているでしょう。それは違うでしょう」と、まったく違う考え方から枠組みを作り変えていく、ということになります。これが「世代」ということを入れたときにみられる、「戦後」の在り様とその相違ということになります。

「戦後」を考えていくときに、したがって、私たちが実感として持っている「戦争に負けたということを出発にして、戦争を反省する」という認識により「戦後」が進行してきたという自明性は、いまや、共有されていません。

八月一五日を戦後の原点とする中村政則型、それに対抗し、高度経済成長に着目しながら、そのもとでの人々の心の在り様、もう少し強い言葉で言えば、「欲望」を軸に考えていく見田宗介・吉見俊哉型を紹介しましたが、それとは異なった考え方が、あらたな世代とともに登場したということになります。

このとき、見田・吉見型は、「戦後」を高度経済成長と重ねあわせて考えることにより、高度経済成長が終わった後は「ポスト戦後」になる、との主張をあわせ有していました。

けれども、いや、そうであればこそ、高度経済成長による社会の変化のあと、その終焉による変化を経験した現在は、さらに今一回の変質が進行しているのではないか。そういう議論もまた、出てきています。「失われた一〇年」「失われた二〇年」ではなく、「ポスト・ポスト戦後」として現在をとらえるのです。さまざまな戦後史認識が提供されていますが、そのことは〈いま〉の認識と結びついていることでもあります。

さまざまな「戦後」のイメージ

さて、このように「戦後」を考えてきたときに、あらためて戦後認識の多様性に直面します。戦後をめぐっては、さまざまな考え方があるということになります。私たちはともすれば、中村政則型の説明が学校教育の現場でもなされていることもあり、一番、馴染みがよいでしょう。しかし、そうではない説明の仕方があるということとともに、さらに若い世代にとってみると、また別の考え方が生みだされてきているということが、ご理解いただけましたでしょうか。

さまざまな「戦後」の考え方がある。そしてさまざまな「戦後」の説明の仕方があるのですが、大切なことは、それぞれにリアリティを持っているということです。いや、正確に言い直せば、リアリティを有していた、ということです。ですから、どの「戦後」が正しくて、どの「戦後」が間違っているか、などということはありません。「同時代史」として考えたならば、それぞれに必然性を持っているということに、他なりません。

しかし、歴史化するということは、認識の淘汰、記憶の洗い直し、体験からは不可視であったものが可視化されるということでもあります。その一例として、いまいちど「敗戦」と「戦後」を考えてみましょう。現在では、ほんとうに「敗戦」によって「戦後」が始ま

るのか、という議論が、教科書のレベルでもでてきています。まだまだ違和感を持つ方たちがいるにもかかわらず、学校の現場では、八月一五日で日本は変わりました、という教え方が変わり、教科書も書き換えられてきています。

なぜ、八月一五日で切らないのでしょうか。いくつかの説明がなされ、根拠があげられます。一つは、一九四五年八月一五日で、戦争が終わったということを言うけれども、戦争終結は日本の国内問題ではなく、対戦国との関係であるということです。すなわち、ポツダム宣言の受諾で戦争が終結するのであり、その受諾を日本が通告したのは八月一四日ですから、戦争の終わりは八月一四日になります。八月一五日は、それを国民に玉音放送という形で伝えたということですから、これは内向きの話です。敗戦―戦争終結は、法的にも、歴史的にも八月一四日、ないし、降伏文書に調印した九月二日であるだろうという議論です。八月一五日で戦時と戦後を切る、という認識が、だんだんと変わってきています。

あるいは、日本を敗戦に導いていった内閣は、鈴木貫太郎内閣でした。そして、敗戦とともに、登場してきたのが東久邇宮稔彦内閣です。鈴木貫太郎の内閣は、アジア・太平洋戦争を主導していった東條英機が失脚をして、（小磯国昭内閣を挟んで）、鈴木貫太郎が敗戦を

演出するという流れです。

つまりこの事態が示しているのは、敗戦の時点では、「反東條」の内閣が政権を執っていたということです。この「反東條」の政権が、アメリカの占領のもと、アメリカと手を結んで、「戦後」の日本の改革を行っていくのが「戦後」の出発ということになります。「戦後」は決してゼロからの出発ではありません。

ことばを足せば、「戦後」に向けての動きは、東條英機が失脚をした時から始まっていると考えられるのではないか、ということです。八月一五日を経ていきなり新しい内閣ができた、そして「戦後」が始まったのではなく、すでに戦争中から準備がなされ、その動きが八月一七日の東久邇宮内閣として顕現した、という考え方です。

そのように八月一五日に体制が変わったというのではなく、戦争中から「戦後」が準備をされていて変わっていったのだ、ということを考えるとき、政治の次元にとどまらない動きも見えてきます。

たとえば戦争中でもすでに、寄生地主が戦争にとってじゃまだ、という動きが進行していました。戦争中に、米を供出させる一方、農村の生産力そのものを上げるというときに、小作人たちに働いてもらわないといけない。小作人たちが意欲を持ち、頑張って働くには

地主がじゃまだという議論が、すでに戦争中からおこっているのです。別の言い方をすれば、農地改革の動きは、戦時からみられたのです。

戦争が終わって、いきなり「戦後」が始まったとするのではなく、むしろ、戦争中から変化があったという考え方です。たしかに、戦争中から、地主を排斥し、自作農を創設維持する動きがあり、生産力を上げるために日本社会の経済の体制を変えようとする動きがありました。いったん、そうしたことに目を向けると、「戦後」に、占領軍が農地改革とか財閥解体を行いますが、それに類する動きがすでに戦争中にあったことが浮上してきます。

戦争中は戦争遂行のために大日本帝国が、戦後は非軍事化のために占領軍がおこなうということで、担い手と目的は替わるけれども、経済への統制を強め、大資本（財閥）の独占を排除し、地主をなくしていこうという動きがあったのです。

同時代の人は当然知っており、歴史家も知っているのですが、担い手と目的の相違によって、このことが重視されてこなかったのですね。同時代の解釈として、連続させ、重ねては考えて来ませんでした。しかし、日本の社会の変革ということを考えてみると、担い手こそ違え、同じことをやっているのではないか、というのが歴史化したときの観点です。

一九四五年八月一五日で切るというよりも、戦時中の変化と占領軍がいた時期の改革と

は一つながりにしたほうがいいのではないだろうか――こういう考え方です。戦争中から占領期までを、日本の社会の体制の変化という観点から、ひとつらなりの動きとしてとらえるということです。「戦後」は、戦中から始まっているという考え方であり、占領が終わるまでが「戦後」であるということになります。

記憶から歴史化へ、というときにこうした認識がみられます。徐々にこうした認識が広まり、教科書レベルでも変化してきているのですね。今まで私たちが自明とした認識が、歴史化されることにより、変わってくるのです。記憶の段階で（ということは、同時代史として）、いろいろな見方が出てくるのですが、その中で、言ってみればレンズを引いた見方がでてき、歴史的な意味付けがなされるのです。

「同時代史」というのは、生きている人たちの経験というものがとても重要なものですから、生きている方たちの実感に伴うような形で、歴史（＝同時代史）が考えられていきます。しかし、だんだん時間が経ってみると、さまざまな意見が出てきます。「戦後第二世代」のように、あらたな経験と認識を持つ世代が登場すれば、いままで自明であると思っていたことが、異なった光景として扱われるのです。そうすると、当初、出発点に置かれていた認識―歴史とはずいぶん違った解釈、考え方が登場してくる、ということです。

中村政則さんは、現在のような解釈――戦争中から戦後が始まったという考え方に対しては賛同しないでしょう。しかし、若い世代は彼らなりのリアリティによって、あらたな歴史像を掲げているのです。

同じ過程を生きてきたはずなのですが、認識が変わってくるということ。それは、〈いま〉の認識の相違でもあります。〈いま〉に対する、さまざまな向き合い方。これは、体験とその記憶と連動しています。

このように見てくると、歴史というものを考えるとき、さまざまな経験とさまざまな記憶、それにもとづく〈いま〉の認識によって組み立てられているということになります。経験も、記憶も、ましてや〈いま〉に向き合う認識もけっして譲り渡すことができないものです。それぞれのアイデンティティと不可分に結びついています。

しかし、個々人それぞれがかけがえのないアイデンティティを持つということは、「他者」の尊重が促されているということでもあるでしょう。そう、歴史が重要であることは、アイデンティティの確認である以上に、他者の発見でもあるのです。そうであるがゆえに、歴史のなかでの論争は重要です。互いに、経験と記憶と認識を出し合って議論をする。

経験や記憶、認識というものを基にして歴史がありますが、そのゆえに、みんなが一致

するということはない。議論を繰り返すことによって、論点が明確になり、共通点も見えてくる。これが同時代史です。

そして、その過程を経ることによって、だんだんと歴史になっていく。歴史化です。歴史化されれば、また「同時代史」とは異なった認識と評価も出されてきます。歴史を考えるというのは、こうした複雑な営みと過程を有しています。

現在では、こうした形で「戦後」がだんだんと歴史になっていくプロセスに入っていっていると思います。

そのとき、まずは、さまざまな「戦後」の描き方があるんだということを自覚し、自らの「戦後」を相対化し、他者の「戦後」と突き合わせることが求められていると思います。やがてなされる「歴史化」のためには、同時代史の過程が必至です。

3　長すぎる「戦後」――時期区分の再検討

「戦後」の新たな世代への問いかけ

最後に、二つだけ付け加えて、お話を終えたいと思います。

一つは、こういうような状況の中で、やはり戦争体験を持っている人は、いら立ちを持

つだろう、ということです。石田雄（たけし）という政治学者がいます。石田さんは一九二三年生まれ、青春時代を戦争の渦中で経験しています。敗戦のときに二二歳であり、しばしば「戦中派」と呼ばれる世代に属しています。

そのゆえに、「戦後」はずっと「平和」「反戦」を主張し、戦後思想を主導してきた人です。その石田さんが、『ふたたびの〈戦前〉』という本を書いています。非常に強い苛立ちを持つものですから、冒頭に、「あぶない！これではまた〈戦前〉になってしまうのではないか」と言っています。現在のような状況を憂えれば憂うほど、八月一五日を原点としなければいけない。八月一五日を原点とすることによって、再び「戦前」を繰り返す愚を回避しようという主張です。

石田さんの危機感はよく分かります。私も、石田さんの声に耳を傾けたく思います。思いますが、しかし、お話しをしてきたような、たくさんの「戦後」の議論がある中で、この主張は多くの人たちに訴えかけるでしょうか。

「戦後」が、ほんとうに八月一五日から始まったの？という問いかけすらもある中で、「再び戦前がくる」という言い方は、通用するかということです。とくに、若い人たちに説得力を持つだろうか、ということです。

二つ目は、文学者・高橋源一郎さんの営みについてです。高橋さんは一九五一年生まれ、「戦後第一世代」に属しますが、若い世代と先行する世代の議論を接合しようという事を試みます。高橋さんは、みずからの「戦後第一世代」と後続の「戦後第二世代」、いやいや、ひょっとしたら、「戦後第三世代」の議論をくっつけようとしているように思います。

具体的には、「戦後第一世代」が持っている戦争や「戦後」の考え方と、「戦後第二世代」が持っているそれ、そして、登場してきているであろう「戦後第三世代」のもつ戦争のイメージを、それぞれ理解したうえで、互いにすり合わせるという営みです。

高橋さんは文学者ですから、戦争を描いた文学――野間宏、大岡昇平らの戦争文学と、「第二世代」が書く戦争文学とを突き合わせます。さらに「第三世代」が戦争文学に対して、あまり関心を示さない中、あえて彼らに向かって、戦争文学の意義を語ります。

高橋さんも、「戦後」のイメージがばらばらであることを前提とし、その三者を繋げていくような議論をしなければいけない、と言うのです。私自身は、同世代ということもあり、高橋さんの営みに共感するものです。

ここに至るまでに、ややこしい話をしました。「戦後」は、いろいろな考え方があるとともに、大きく塗り替えられてきてもいます。私たちは、「戦後」を考え、むきあう上で、重

要な時期に来ているということをお話しさせていただきました。
ご清聴どうもありがとうございました。